2020 年 3 月 15 日 川越教会

丸山　勉

命の木イエス

[聖書] ヨハネによる福音書 15 章 1～17 節

「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である。わたしにつながっていながら、実を結ばない枝はみな、父が取り除かれる。しかし、実を結ぶものはみな、いよいよ豊かに実を結ぶように手入れをなさる。わたしの話した言葉によって、あなたがたは既に清くなっている。わたしにつながっていなさい。わたしもあなたがたにつながっている。ぶどうの枝が、木につながっていなければ、自分では実を結ぶことができないように、あなたがたも、わたしにつながっていなければ、実を結ぶことができない。わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである。わたしにつながっていない人がいれば、枝のように外に投げ捨てられて枯れる。そして、集められ、火に投げ入れられて焼かれてしまう。あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言葉があなたがたの内にいつもあるならば、望むものを何でも願いなさい。そうすればかなえられる。あなたがたが豊かに実を結び、わたしの弟子となるなら、それによって、わたしの父は栄光をお受けになる。父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛してきた。わたしの愛にとどまりなさい。わたしが父の掟を守り、その愛にとどまっているように、あなたがたも、わたしの掟を守るなら、わたしの愛にとどまっていることになる。

これらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたの内にあり、あなたがたの喜びが満たされるためである。わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である。友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。わたしの命じることを行うならば、あなたがたはわたしの友である。もはや、わたしはあなたがたを僕とは呼ばない。僕は主人が何をしているか知らないからである。わたしはあなたがたを友と呼ぶ。父から聞いたことをすべてあなたがたに知らせたからである。あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るようにと、また、わたしの名によって父に願うものは何でも与えられるようにと、わたしがあなたがたを任命したのである。互いに愛し合いなさい。これがわたしの命令である。」

[序] 「つながる」という信仰

　ヨハネによる福音書には、イエス・キリストの特徴的な自己宣言（自己紹介）の言葉がいくつも出てきています。これまでも福音書の順序からご一緒に聞いてきました。―「わたしは命のパンである」、「わたしは世の光である」、「わたしは（羊の）門である」、「わたしは良い羊飼いである」、「わたしは復活であり、命である」、「わたしは道であり、真理であり、命である」。そして今日が７つ目、最後の自己紹介の言葉です。それは、「わたし

はまことのぶどうの木である」（15:1）という言葉です。

一度聞いたら忘れることが出来ない印象的な言葉です。**「わたしはまことのぶどうの木」。**例えば大きな教会のステンドグラスなどによくデザインされますよね。でもその場合、デザインされるのは、どちらかと言うと、ぶどうの「木」や「幹」よりも、ぶどうの「房」や「実」ではないでしょうか？　実はそれがこのイエス様の話のポイントの一つではないかと思います。まず木があって、また枝があって、そして実がなる訳ですけれども、「実」が結ばれる、そのためにぶどうの幹の存在はあるのですね。**「実」がなってこそのぶどうの木**です。木や幹は「実」が命豊かにその実を結ぶために、その枝とつながり続け、支えている訳です。まるで背後に隠れているかのようです。そして、農夫も又「実」がなるように丁寧に手入れをしてくれると言うのです。

今日読んで頂いた 15 章 17 節までには、何度も何度も**「つながる」、「とどまる」**という言葉が出てきます。「ネメイン」というギリシア語ですが、10 回以上出てきます。これが、信仰の秘密なのではないでしょうか？―「信仰」とは、「つながる」ことなのです。いわゆる「信心の強さ」とか「無の境地になる」ということではありません。そうではなくて、ぶどうの実を結ぶ「枝」がそうであるように、「命の木」（幹）とつながることです。いや、実はもう既につながっているのです。**「幹」があってこその「枝」**なのですから。「枝」は「幹」に「とどまって」いれば良いのです。

［1］ 人間は神様との「関係存在」

人間とは、**「つながって」生きている存在**であるということを、聖書は初めの**創世記**でハッキリと語っています。人間というものは、偶然に生まれて来たものではないのです。主なる神様が、土の塵から人を創造し、ご自分の命の息をその鼻に吹き込まれることによって「人間」は「人間」になりました。**初めから「関係存在」**なんです。やがて、その初めの人アダムは、パートナーとなるエヴァに出会います。神様がその出会いを与えて下さいました。ここにも「つながり」がありますね。

「つながる」というのは実に不思議だと思います。これは**神様の神秘であり、祝福である**と思います。他者同士がつながることによって、そこに新しい命が生まれますね。男女の交わりもそう、動物たちもそう、また、植物も受粉することでさらに命がつながっていく訳です。このような世界を作られたのは、神様なのだと聖書は言います。そして、人間の原点・出発点は、神様の霊を受けている、頂いているという、その「つながり」なのです。そこを外れてしまうとどうなるのか？それも聖書は書いています。

創世記 3 章の「園のどの木からも取ってはならないなどと神が言ったのですか？」とのサタンの誘惑からはじまり、ついにアダムとエヴァは、神様に聞き従うという最も大切なつながりを自ら切ってしまったのです。言ってみれば、ぶどうの枝が自分か

ら（自分からです！）その幹から離れたということです。そこで待っていたことは、“命の源”から自分を切ってしまったのですから、**命がない存在、つまり死ぬべき存在**になってしまったということです。それは丁度今日の 15 章の中の言葉のようです。15 章 6 節。**「わたしにつながっていない人がいれば、枝のように外に投げ捨てられて枯れる。そして、集められ、火に投げ入れられて焼かれてしまう。」**このような所を読むと、「ああ、どうしよう、私は捨てられてしまうのではないか」と思ってしまわないでしょうか？―けれども、私はそう思う必要はないのではないか、と思います。イエス様は私たちをおびえさせるためにこう語られたのではないと思うのです。事実、11 節では**「これらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたの内にあり、あなたがたの喜びが満たされるためである」**と語れています。おびえどころか、喜びを与えたいとおっしゃっています。

イエス様は、自ら神様とのつながりを切ってしまった、そのような者たちのために、（つまり私たちのことですが）その者たちが**もう一度命の源とつながることが出来るために、神様の愛に留まらなかった罪を赦し、父なる神様との関係を回復させるためにこの地上に来て下さったお方**ではないでしょうか。そこにあるのは、**この独り子を送って下さった父なる神様の愛**です。その愛が大きくて深いから、このような厳しい言葉も出てくるのではないでしょうか。

「わたしはまことのぶどうの木」。ぶどうの木というのは、ユダヤの人々にとっては馴染みのある木でしたが、それはまた、自分たちは罪を犯して悪いぶどうとなってしまって、神様から裁かれてきた歴史を持っているということも知っていました。つまり「いつわりのぶどうの木」です。しかし、今や、イエス・キリストが「<u>まことのぶどうの木</u>」となって、再び自分たちとつながってくれる。「死」ではなく「命」につなげて下さる。ここに、新約の新しい時代が開けているのです。

[2] 「わたしにつながっていなさい」

今テレビをつければ、**新型コロナウィルスの感染拡大**のことがいつも真っ先に言われますね。無理もないことだとは思います。国によってまちまちですが、命を落とす人たちがまだ増加傾向にありますから。少しでも早い終息を心からお祈り致します。何とも言えない不安が、世界に、また日本に、ウィルス以上に広がっているように思えてなりません。このような時こそ、**私たちが真に頼るべきものは何なのか**、そのことが問われているように思えるのです。

ヨーロッパの写真など見ますと、いつも観光客で賑わっている所も気持ちが悪い位人気（ひとけ）がありませんね。接触感染や空気感染を恐れ、また予防のため、外出や移動が制限されているところも多いですし、生命力あふれるスポーツや音楽の催しなども、軒並み中止や延期になっていますよね。

とても**皮肉なこと**だなぁと思うのです。人間が健やかであると言うことは、自分以

外の他者との色々な関係の中に生きる、接するということではないかと思いますが、今は多くの人たちと、特に閉じられた空間の中で接することは「好ましくないこと」のようになっています。**「つながり」が制限或いは自粛要請されている**この頃です。やむを得ないことだとも思いますが、何か、気持ちが悪いものを感じてしまうのです。ウィルスを恐れている訳ですが、空気全体が、何かとてもお互いに**疑心暗鬼**になってはいないでしょうか？　もしかすると、私たちは新型コロナウィルスの感染の力の大きさにばかり心を囚われていて、もっと大きな力である神様の愛を、ウィルスほど信じていないということになってはいないでしょうか？　「疑心暗鬼」は人を孤独にします。**「コロナ鬱」**などという言葉も現れてきています。私自身も若干それが分かるような気がします。何か重苦しい空気、抑えつけらえているような閉塞感を感じるのです。

イエス様は、今、そのような私たちに向かってこのように言われるのです。―**「わたしにつながっていなさい。わたしもあなたがたにつながっている」**（15:4）。何という有り難い言葉でしょうか！　これは、直接的にはイエス様の弟子一人ひとりに言われている言葉ですけれども、その弟子と言うのは、13 章の後半を見てみると、例えばペトロに「鶏が鳴くまでに、あなたは三度わたしのことを知らないと言うだろう」と言われたように、皆主イエス様から離れて行ってしまうことをご存じの上で、主イエス様は言われているのです。これは、言ってみれば、イエス様の**遺言**です。「これだけは受け止めてほしい」ということです。あの最後の晩餐の後で言われました。**「わたしにつながっていなさい」**、或いは**「わたしの愛のうちにとどまりなさい」**（9 節）と。

ここにはもう既に**十字架の赦し**が見えています。全く弟子たちを責めていません。それどころか、サタンの誘惑に負けてしまう弟子たちを、再びサタンの力から引き戻す力ある招きがここにはあります。イエス様は、弟子たちの弱さをよく知っている上で、しかし、きっとわたしの愛の中に帰ってきてくれるということを信じているのではないでしょうか。このイエス様というぶどうの木は、命の木は、枝である弟子たち、私たちをどこまでも離さないのです。その理由は何か。15 章 16 節にこうあります。**「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。」**―ここに、私たちの信仰の立ち位置があります。信仰の根っこがあります。

［結］「わたしの友」と呼ばれている

イエス様は、ヨハネ福音書によると、十字架に架かられる前の夜にこれらの言葉を語られました。先ほど**「遺言」**と言いました。一般に人が「遺言」で気になることと言えば財産分けがあるのでしょうか。お金持ちは大変ですね。けれども、イエス様はいわゆる財産はお持ちになりませんでした。お財布をもっていたなんてどこにも書いていませんよね。けれども、一番私たちに必要なものを残して下さいました。それは、神様が全く私たちを受け入れて下さっているという、私たちを一人ぼっちににしないという**「愛」**です。12 節から読んでみます。

「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である。友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。わたしの命じることを行うならば、あなたがたはわたしの友である。もはや、わたしはあなたがたを僕とは呼ばない。僕は主人が何をしているか知らないからである。わたしはあなたがたを友と呼ぶ。父から聞いたことをすべてあなたがたに知らせたからである。」

これは素晴らしい言葉ですね。イエス様は、このご自分の受難の時に、ただ弟子たちへの愛だけを語っておられます。その中で私たちは、こともあろうに、イエス様から**「わたしの友」**と言われているのです！「私」という「友」のために、**ご自分の命を惜しまず差し出して下さった**のです！　捨てられてそのまま枯れてしまっても当然のような枝のために、それを**「尊い枝」として、「実を結ぶ枝」として、命の木に接ぎ木**して下さったのです！<u>十字架は、「命の木」そのもの</u>ではないでしょうか。

あのマザー・テレサは、こういう言葉を残してくれていますね。
「多くの人は病んでいます。自分がまったく愛されていない、いなくてもいい人間なんだと…。人間にとって、一番ひどい病気は、誰からも必要とされていないと思うことです。」

今回の新型コロナウィルスが、世界の人々を「孤独」という病気に導こうとするなら、私たちは、この、**全ての人をあるがまま包み込む神様の愛に皆が"感染"出来るように**、まことの平安と喜びの中に共に進んでいくことが出来るように、祈って行きたいと思います。そのためにも、私たちは主イエス様の言葉にとどまり、互いにイエス様の愛に根差して愛し合い、許し合い、神様の愛がこんな私たちを通しても流れていくことが出来るよう、それぞれが**個性あるぶどうの房、ぶどうの粒**とさせて頂きたいと思います。
私たちが真に寄り頼むのは、このお方とのつながり以外にありません。

お祈り致します。

神様、主のご受難・レントのこの時、イエス様の遺言の言葉を聞かせて頂きました。
……